

## 式辞（平成26年度）

平成26年度学位記授与式にあたりお祝いの言葉を申し述べます。卒業生の皆さん、おめでとうございます。以前は高校を卒業すれば社会に出て働くのが当然とされ、一部の恵まれた人だけが大学に行って社会に出るまでの数年間を好きな勉強その他をして過ごす、と考えられていました。今日ではその観念は薄れていますが、それでも、それが恵まれた状況であることに変わりはありません。人間として完成する二十歳前後の数年間を社会から一步引いた静かな環境のなかで勉学と友情のなかで過ごすことの価値には計り知れないものがあります。その状況を確保してくださったご家族の方々に、皆さんと共に感謝を捧げたいと思います。

今から4年前の3月11日に東日本大震災が日本を襲い、そのためその年の卒業式は2か月延期されて5月29日に挙行されました。入学式も2週間遅れの4月16日に挙行されました。卒業式と入学式の順序が逆転するという現象が起きたわけです。皆さんの多くはまさにその日の入学式に列席されたわけであります。皆さんの大学生活は、大震災後の混乱と喧噪のうちに過ぎたと言っても過言ではありません。そのなかには政治的不安定ということもあったわけで、皆さんは自分たちの将来への不安を抱えながらの4年間だったと思います。そのなかで皆さんはよく努力されました。そのことを、本学関係者は等しく誇りに思っています。

大学側も震災対応に追われた日々でした。会議を重ね、学生やご家族にご理解とご協力を求めてきました。そして4年たちました。4年前のあの日に入学した人たちが本日卒業する、ということに、本学関係者として感慨なきをえません。

しかし、そのような感慨が社会的にどのような意味を持っているかということになると、話は途端に曖昧になります。東日本大震災で提起された諸問題はその後どうなったか——そこでは事実だけが問われます。事実として、データとして、どの点がどこまで解決されたか、だけが問題とされます。何事によらず、皆さんは個人的な感慨など何の力も持たない厳しい社会にこれから出てゆくことになります。社会はどうあるべきか、現在の社会はあるべき姿からどの点でどのようにずれているか、を、事実在即して考えながら、確かな足取りで進んでいってください。それが社会人になるということの意味合いにほかなりません。そして、そのための基礎力を大学で培ったのだということに自信と誇りを持っていただきたいと思ひます。

皆さんはこれから社会で活躍されるわけですが、そして社会は皆さんの活躍を歓迎しているはずですが、社会に出られた皆さんがまず実感されるのは、活躍するには制約とか制限とかが多すぎる、ということかと思ひます。こういうことをしなければならぬ、とか、こういうことをしてはいけない、とかいう言葉を聞いているうちに、自発的な活動意欲がだんだんに萎えてくるのを感じられるかもしれません。しかし、ここで申し上げたいのは、制約こそ活動の源だということです。制約とは活動の場を設定することであって、いわば、スポーツにおける競技場のようなものです。選手たちは動ける範囲を頭に叩き込んで競技することになります。動く範囲が限定されるからこそ、動けるのです。どこまで動けるかがはっきりしている、ということほど、動きを楽にしてくれるものではありません。そして、制約を活動の原動力にするほどの気概がなければ、この世ではとてもやってゆけない、ということ、ここで申し上げたいと思ひます。皆さんは、どこに身を置こうと、まず、自分に託された仕事と責任はどこからどこまでかを、事実としてしっかり確認して、その範囲のなかで最大限に動き回することを考えてください。そうすれば、そのうちに範囲そのものが拡大してゆくことを実感なさるでしょう。それが発展ということにほかなりません。

ところで、むごたらしい事件が後を絶ちません。これが人間のやることか、と思えるような行為が、国内・国外で、個人によって、あるいは特定のグループの名において、なされています。そしてそのとき、私たちは、人類に共通の人間性といったものは存在しないのではないかと、思いたくなります。それは当然のことですが、しかしながら、共通の人間性が存在するという前提で人間の文化が発達してきたことは事実です。明らかに非人間的と思われる人をも人間とみなし、そのことの痛みを共有する覚悟がなければ、人間としての進歩はありえません。人間としての痛みを共有していない人が非人間的な行為に走るとも言えるのです。

大事なことは、どんな残虐行為にも、歴史的な、あるいは社会的な背景があるということです。だからといって行為その

ものが正当化されることはありませんし、これを弁護する必要もありませんが、歴史的・社会的背景を事実としてとらえ、整理し、解釈するということがなければ、問題そのものが解決されることはないでしょう。

私たちは、世界で何が起ころうと、共通の人間性への夢を捨てることはできません。その夢を捨ててしまえば、もはや人間世界は存立してゆかなくなるのです。これから先、社会がたとえどのような局面を迎えようと、皆さんが人間としての誇りと夢を失わず、力強く生きていって下さることを、そして、そのことを通じて社会をリードするよう努めて下さることを切望します。そのためにこそ本学の教育はあるのだということを忘れないでいただきたいと思います。

最後に、改めてご列席のご家族の方々にお祝いと御礼を申し上げ、卒業生の皆さんの今後のご健康とご活躍を祈念し、式辞といたします。

平成27年3月15日

共立女子大学  
共立女子短期大学  
学長 入江和生